

鎌倉期における經典印刷と流布 春日版大般若經を中心に

稲城信子

The Printing and Circulation of Buddhist Scriptures during the Kamakura Period

はじめに

- ① 春日版大般若經の特色
- ② 奈良県下の春日版大般若經
- ③ 嘉祿版の校合について
おわりに

〔論文要旨〕

本論は、奈良市興福寺で開版した「春日版」の内、嘉祿版と称される大般若經について考察を試みたものである。春日版の研究は、大屋徳城氏の一連の研究以降進展はみられない。ここでは、平成元々七年度にかけて実施した奈良県下に所在する大般若經の調査結果をまとめた『奈良県大般若經調査報告書』一・二（一九九二・一九九五）年刊行）のデータを用いて鎌倉期における經典印刷と流布の問題を春日版の摺写を通して考えてみた。

まず、春日版の特色を考察してみた。嘉祿版といわれる大般若經は貞応元年（一二二二）～嘉祿三年（一二二七）に開版されている。大般若經は六〇〇巻で構成されているが、摺写するには約八四〇〇面の版木が必要となり、わずか六年間でこの雕造がなされたのか疑問に感ぜられる。この開版に関与した人々は五〇名に及ぶが、この中には興福寺の歴代別當をはじめ、三輪上人慶圓などの名がみられる。嘉祿版の刊記の全容は余り知られておらずこれを明らかにすることによって、中世興福寺における勸進写經のあり方を考える資料を提供することになるとおもわれる。

次に、奈良県下に所在する室町期までの「大般若經」（調査件数 三二六三三巻）の内、鎌倉中期～室町末期までの春日版は、一〇二三八巻みられた。これらの時代別分類、後摺、補刻などの調査結果を元にして摺写の問題を考えてみた。この考察によって、同一巻次であるにもかかわらず、刊記の異なるもの、刊記の場所の異なるものなど問題点がみられた。

書写經と異なり、版經には校合を必要としなとおもわれるが、嘉祿版に校合がおこなわれる例がみられる。建長四年（一二五二）～正和元年（一二三二）にかけて、「恒心」・「延玄」・「圓順」・「融乘」らの専門僧による校合作業がおこなわれたことが各本から知られる。これは、書写經のために春日版が底本としての役割を果たしていたことを示すものである。しかし、写經の性格の変化とともに經典の校合は、形式化されていく。今後の課題として補刻本と後摺本の関わり合いと現存する版本についても考える必要がある。